O2-001

ダウン症候群の粗大運動の関する調査研究<第二報>歩行獲得に至る運動パターン

伊東　祐恵[1]、星山　麻木[2]、今井　美保[3]
[1]横浜市西部地域療育センター
[2]明星大学教育学部
[3]横浜市戸塚地域療育センター

【目的】
我々は、ダウン症候群（以下、DS）79名を対象に粗大運動の獲得時期と知的水準（以下、IQ）の調査研究<第一報>において、①歩行の平均獲得月齢は28.6±11ヶ月と定型発達の2倍以上の遅れがあり、②歩行獲得月齢と知的水準には有意な相関（r=0.668）があることを報告した。本研究では、同対象のDSの歩行までの運動パターンを質的・量的に調査し、DSの運動発達の特異性の一側面を明らかとする。
【方法】
対象は、2016年8月までにA療育センターの小児科を受診した2004年4月2日から2014年4月1日に出生した10学年のDS児79名（男44名、女35名）とした。方法は、診療録より粗大運動（定頸・寝返り・座らせ座位・ひとり座位・ずり這い・手膝這い・つかまり立ち・伝い歩き・1人立ち・歩行）の獲得時期より、運動パターンを調査した。対象の殆どは乳児期から理学療法を実施していた。倫理的配慮は横浜市リハビリテーション事業団研究倫理委員会に承認されている。
【結果】
歩行獲得が18か月以内の児は9名（平均IQ56.8）、19か月～2歳以内は22名（平均IQ 51.6）であった。歩行獲得に時間を要した児は、3歳台は11名（平均IQ　40.5）、4歳台は3名（平均IQ30）、5歳台は2名（平均IQ27.5）、未歩行は1名（IQ25）であった。つかまり立ちから歩行獲得に1年以上要した児は19名であった。手膝這いから歩行獲得に1年以上要した児は20名であり、手膝這いを獲得しなかった児は15名であった。シャフリングは25名、内9名は手膝這いを行わずに歩行を獲得した。背這いは2名であった。
【考察】
DSは知的障害が軽度であると歩行獲得が遅れないことがあると考える。つかまり立ちから歩行獲得まで1年以上かかった児は24%、手膝這いから歩行獲得まで1年以上かかった児は25.3%おり、定型発達より時間を要すると考える。移動は、ずり這い・手膝這いなど定型発達に加えてシャフリング・背這いがあり、手膝這いを行わない児も一定数いるなどバリエーションがあった。また、シャフリングは31.7%とDSが行いやすい運動パターンと考える。DSの運動発達は、運動と精神発達の関係、運動獲得に必要な時間の見通し、多様な運動パターンを踏まえて支援していきたい。

O2-002

保護者の育児ストレスと発達障害に近似する子供の行動特性の認識の関連に関する調査

山中　梨央[1]、塩飽　仁[2]、入江　亘[2]、菅原　明子[2]
[1]東北大学医学部保健学科　看護学専攻
[2]東北大学大学院医学系研究科　保健学専攻　小児看護学分野

【背景と目的】
発達障害に近似する行動特性を持つ子供を育てる両親は，通常の育児ストレスに，子供の行動特性によるストレスが加わり，より強い育児ストレスを感じていると考えられる。そこで子供の発達障害に近似する行動特性の認識が両親の育児ストレスに与える影響とその背景要因を明らかにすることを目的とした。
【方法】
小学1，2年生の子供の両親に，基本属性，子供の発達障害に近似する行動特性の認識，育児ストレス，自身の被養育経験等についてweb調査を実施し，回答を統計的に分析した。実施にあたり所属施設の倫理委員会の承認を得た。
【結果】
母親・父親各279名に配布し，母親89名，父親47名の有効回答を得た。両親ペアの回答は35組であった。ADHD近似行動特性9項目の選択数と育児ストレス，ASD近似行動特性の4項目の選択数と育児ストレスは母親，父親とも有意な正の相関があった。母親では子供のADHD近似行動特性を1項目でも認識すると育児ストレスが強くなったが，父親では影響がなかった。母親は「よく細かい部分を見落とす」など，子供を傍で見て気づきやすい行動に育児ストレスを感じやすいのに対し，父親は「物事を忘れやすい」などの行動にストレスを感じやすかった。育児ストレスの項目ごとに見ると，母親は父親と比べて「子供のことでくよくよ考える」「育児のために我慢ばかりしている」といった育児負担に伴うストレスを感じやすいことが明らかになった。また，母親は自身の父親による拒否的な養育，父親は父親による干渉的な養育を受けたことが育児ストレスを高めていた。
【考察】
両親ともに発達障害に近似する子供の行動特性の認識は育児ストレスを高めており，日頃の子供との接し方等の違いが影響していると考えられた。両親の捉え方が相補的となるような両親の共通理解の推進が重要である。また，両親の被養育経験が現在の育児ストレスに関連しているため，両親の支援では被養育経験もアセスメントする必要性がある。
【結論】
1.母親，父親ともに発達障害に近似する行動特性を認識するほど育児ストレスは強くなり，またストレスを感じる行動特性は両親で異なっていた。2.母親は子供の行動が直接的に育児ストレスに影響を与えるが，父親はあまり子供の行動の影響を受けていなかった。3.両親それぞれの父親による被養育経験が現在の育児ストレスに関連していた。

Presented by Medical*Online